

# 特別支援教育の史的研究

## —高知県の特別支援教育歴史的変遷その1—

A Special Support Education of History Research  
Kochi of Prefecture Special Support Education of History a Change

田中 誠

石山貴章 (九州ルーテル学院大学)

宇川浩之・矢野川祥典 (高知大学教育学部附属特別支援学校)

TANAKA Makoto<sup>1</sup>, ISHIYAMA Takaaki<sup>2</sup>

UGAWA Hiroyuki<sup>3</sup>, YANOYAMA Yoshinori<sup>4</sup>

*key words* : 特別支援教育、萌芽期、発展期、高知プラン

### I, はじめに

教育とはその本質的機能として被教育者に文化の伝達と想像をはかる社会的機能をもつ。さらに教育とは、被教育者に人格体としての価値の実現を意図する。すなわち、いかなる人間を好ましいとし、文化のなかのいかなる要素を伝達し創造をはかるかという人間形成の方向性を与える教育理念(目的)がなくしては、真なる意味での教育は考えられない。

知的障がい児は、知的能力が劣るがゆえに、文化の継承や創造や価値を見いだすことができる存在でないと判断され、知的障がい児に対する教育は、健常児の教育よりもきわめて遅く始められた。だが知的障がい児は人間として生まれた以上、他とかけがえのない一人の人格的価値、権利を有している。直接的に社会に貢献する度合いが少なくとも、間接的に貢献する度合いが大きい。

知的障がい児の置かれている状況を理解することによって、権利の実態を普遍的に捉えることもできる。すなわち、特別支援教育とは、単に障がい児を教育するという点に目的があるのではなく、彼らとともに歩み、心を交え、人間存在の基本的なことを追求するという点にあると思われる。

### II, 研究目的

第二次世界戦後、生活の極めて厳しい時期に障がい児たちが自立自活をしていけるようにということを中心に据え、生活能力を高めるということを目標とし形式にとらわれないで教育に創意性が発揮された。しかし、社会の生活も安定し、豊かなものになり学級・学校の数

も増加してくると、教育方針も教育内容も型にはまったものになり、管理型といった傾向が考えられる。そこで本研究は白紙の状態から始められた教育を省み今後の糧とする。

### Ⅲ、研究方法

本稿では、高知県の特別支援教育に長年携わった先駆者の「ヒューマンティ」を掲げた実践と研究に関する文献資料の収集、分析をおこない考察する。

### Ⅳ、特別支援教育の萌芽

黒川（1967）の報告では、高知県の特別支援教育は、昭和二四年高知市立昭和小学校、三里小学校、旭小学校および伊野町立伊野小学校に一学級の特殊学級が設置されたところからスタートした。<sup>2)</sup>

戦後、新教育の理念のもとに文部科学省（旧：文部省）、により特別支援教育が提唱され、特別教育合宿講習会（昭和二二年）が行われ、益弘善次氏の実践によって、昭和二四年に四校開設に至った。これらの設置学校の選定に際して、特に学校体制、担任教員の選任等が多面的にしかも慎重に選定された。選考の目安として、特別支援教育講習会への受講者を中心に、児童理解の上に実践的でしかも研究心旺盛な教員に的を絞られたようである。上記高知市の三校では学級担任は川崎誠樹氏、久保五九百氏、川添軍治氏、伊野町立伊野小学校では「青空学級」として学校裁量による特別学級を設けその担任であった高野信寛氏が選ばれた。この時代は模索と創造の時代であり、特殊教育に対する行政的な裏付けは整っておらず、研究するにも参考図書も皆無に等しく学習指導要領、教科書もむろんなく白紙の出発であった。<sup>3)</sup>

当時の担任教員は、誰もが「われこそ特別支援教育の創始者」と、パイオニア精神に満ちあふれ、普通教育の亜流（単に程度を下げた水増し教育）から一日も早く脱皮して、真に障がい児のためにあるべき姿を打ち立てようと努力していたことと想像できる。さらに、担任教師は子どもを見つめ、子どもとの深い結びつきの中で障がい児をいかに理解するかが基本的な課題であり、子どもを見つめ、子どもとの深い結びつきの中で、いかに理解するかが基本的な課題であり、その上に立って個に応ずる指導方法の研究が日々試行錯誤を重ね追求していた、と推察できる。

特別支援学級の芽生え期頃は、学校によって、精神発達以外の面で問題をもつ、反社会的・非社会的不適応児や長欠児、出席不足児童を混成したものであり、学級編成も指導内容・方法も特別支援教育へと確立されるまで相当曲折した時期であった。<sup>8)</sup>

この当時、わが国の特別支援教育の学級についてみると、昭和二四年度の設置状況において、特別支援教育学級六一、身体虚弱、情緒障害などとの、いわゆる混合特別支援教育学級一九となっている。<sup>9)</sup>

いずれにせよ、新制度の学校教育は、敗戦後の社会的、文化的、経済的悪条件の下で発足

しており、教育環境条件も当然のことながら不備であったことと思われる。これらの悪条件は、必然的に児童、生徒の学力低下もあったと考えられる。学力低下への応急対策として、能力別学級編成などによる指導を行い促進学級的な性格であり、特別支援教育学級かどうかの判断が困難な学級も存在したと思われる。

担任教員はこうした状況を脱却するために特別支援教育の本質追求を図り、講習会、県外視察研修へ積極的に参加し、さらに担任教員相互の定例会（研究会、情報交換会）を設定し心血を注いだ。高知市においては、日頃の教育実践の成果を問うべく、昭和二四年に「障がいのある児童の教育」、昭和二五年に「教育課程について」、昭和二六年に「子どもをみつめて」、各校特別支援学級担任が研究集録を作成し研究会を開催した。研究集録とは、教育計画や日々の実践記録であり、事例研究であり、特別支援教育の普及啓発に大きな役割を果たしたと黒川（1973）は述べている。<sup>3)</sup>

しかし、この時代の特別支援教育は職人技的なものであり、昭和二九年高知県特殊教育研究会発足まで待つしかなく、その中心的役割は特別支援教育学級担任者会に求められていたレベルであったと考えられる。

## V、特別支援教育の発展期

萌芽期の学級設置とは趣きを変えた形で、保護者、地域、学校、設置者から、学級設置への要望が高まってきた。その一つには、土佐山町立山田小学校である。昭和二六年山田小学校教諭門脇一彦氏の提唱により「遅れのある子どもをもつ親の会」が発足した。昭和三〇年一月「現：土佐山田町知的障害者育成会」が結成へ受け継がれ、特別支援教育学級設置の要望となり、同年四月設置認可へと発展した。また、昭和三五年長欠、不就学対策（対応）として全国に先駆けて県下の要所に福祉教員を配置し、出席督励等の活動が行われた。長欠・不就学児童・生徒を学校教育に適応させるため、促進学級等の呼称で特別指導する中から特別支援教育の認識へと発展、学級措置に至った。<sup>5)</sup>

特別支援学級の設置が小学校において始められた高知県では、当初中学校への関連設置計画が十分でなかったため、六年生になると普通学級へ編成替えをして中学校進学への移行措置をとるなど、または中学校から小学校特別支援学級へ教育委託して当座をしのいだ。

昭和三二年には、県下初の中学校特別支援学級が赤岡町立赤岡中学校と高知市立城西中学校に設置された。城西中学校の在籍児童・生徒に措置については小・中一貫に教育主張を置き、小・中学校併設の運営であった。

特別支援教育の理念はどの学校も同一であり、特別支援学級の必要性、妥当性が定着し、散発的あるいは連鎖的に新設の要望、中学校への関連設置が、同時にまた児童・生徒の増加ならびに指導体制確立のため複数設置も求められるようになった。しかし、小・中学校の児童・生徒の急増期に直面し、行政側は特別支援学級の編成基準を国の標準とは別に暫定基準を二〇人と定め、新設・増設も思うに渉らず、行政、学校とも苦難の時代に強いられた。

この時期、高知県下では特殊学級の増加傾向がみられたが、さらに教育研究・教育実践が活発化し「何をどのように指導するか」について組織的、体系的に考察を加える段階へと進んだ。<sup>3)</sup>

時期同じくして特別支援教育・研究が全国的な流れとして教育課程の論議が活発化しつつある矢先でもあった頃でもある。

高知県の特別支援教育組織として、これまでは高知市を中心とした特別支援学級担任者会が、昭和三〇年半ばから県下の組織へと発展し行政支援のもとに県下の設置校によるまわりもち形式による特別支援教育月例会へと発展し、行政、学校との提携によって高知県特別支援教育研究大会、四国特別支援教育研究大会、教育課程研究大会が活発に行われ、指導内容・指導方法をめぐって研究と実践の積み上げがなされた。

この時期の研究としてユニークなものに、西谷（1973）の「高知プラン」<sup>11)</sup>が挙げられる。この教育カリキュラムは、知的障がい者の生涯教育と学校工場方式を提唱したものである。さらに、この教育カリキュラムは後々に県下の特別支援教育に大きな影響を及ぼし、特別支援教育諸学校では実践されることとなった。

高知県特別支援教育カリキュラム研究委員会（1961）は、「もてる力を最大限にのぼし、豊かな人間性を培っていくこと、その上にたって健康な生活人をつくりだしていくこと」、障がいをもつ子供の教育であればある程、独善をはなれて客観性の上に立たなくてはならない。現在もっている教育計画と、その独自の体系の中に、もし重要な要素が欠けているとすればことは重大である。私達はもうそろそろ自分の仕事に、そうした意味での反省と批判を加えなくてはならない。このことが、高知県の知的障がい児教育の質をふかめていく仕事である。と述べている。<sup>4)</sup>

これは、戦後の社会的混乱を背景に学校における非行対策や長欠対策が重要となり、その課題解決の一環として、特別支援学級が設置され、存在することあり、様々な性格をもった特別支援学級であった。こうした中に指導の内容や方法は、通常の学級における一般的な教育をよりどころとして、学力のきわだって低い児童・生徒を対象にして、学年段階を下げた指導内容を、やや丹念に、繰り返し指導しようとする、いわゆる普通教育の「水増し教育的な性格が顕著であったと考えられる。

西谷（1973）は、「高知プラン」について教育計画を論理的に体系的に考え、さらに補完する根拠を知的障がい児の適性職業群の要求する身体的、精神的諸特性に求め、ミニマムエッセンシャルズとして諸要素を抽出し、教育計画に織り込むことを意図した。<sup>11)</sup>この研究は、昭和三二年高知市立旭小学校において始められ、労働省（現：厚生労働省）刊行の職業辞典により、知的障がい者適職分類（案）が作成され、高知県特別支援教育カリキュラム委員会を設置し、心理、労働、職業指導、特別支援教育関係者等の広範な専門家の協力によって昭和三六年に完成された。高知プランが完成、文部省（現：文部科学省）の学習指導要領案の成立とも前後した時期であり、高知県の特別支援教育に大きな期待が寄せられた。

## VI, むすびに

戦後の混乱期にスタートした高知県特別支援教育は数名のパイオニア的な教員の資質向上が挙げられる。何もない条件下で、手探りで日々の教育・実践・研究の取り組みが感じられる。この当時から、特別支援教育目標として「社会的自立」が終局の目標とされた。教育内容においては、「学校卒業後に予想される将来の自立的な生活に最小限必要なものは何か」と、ということが考えられ、その観点から教育内容・方法が選択された。従来の伝統的な学校教育を子どもの実生活との結びつきが希薄であるとみて「ごっこ学習」から、実際的な生活活動を学習活動として取り入れ、「現実度」の高い生活を掲げ、学校工場方式とか校外実習（職場実習）方式<sup>4)</sup>とよばれる、徹底した職業教育ないしは職業教育的色彩の強い生活主義教育の形態が生まれた。

## 付記

本研究に際して、高知大学教育学部附属特別支援学校副校長：山崎敏秀氏、元高知県立中村養護学校校長：土居秀臣氏、元高知大学教育学部附属養護学校文部科学教官：足立憲二氏より資料提供と同時に多くの先達諸氏が特別支援教育に捧げた熱意をご教示いただき深く御礼申し上げます。

## 文献

- 1) 糸賀一雄,田中昌人(1956):精神薄弱者の社会的適応.教育心理学研究,3,204-213.
- 2) 黒川貴郎(1967):高知県における精神薄弱教育の現状—特殊教育に関する調査報告—.高知県教育センター,5.
- 3) 黒川貴郎(1979):日本の精神薄弱教育—戦後30年— 第六巻地域史Ⅲ.日本文化科学社,133-149.
- 4) 小出進(1979):日本の精神薄弱教育—戦後30年— 第二巻教育の方法.日本文化科学社,9-19.
- 5) 倉橋俊彦,野口耕三(1985):創立30周年記念誌—わが校の歴史—.高知県立山田養護学校,21.69-88.
- 6) 高知県精神薄弱教育カリキュラム研究委員会(1961):精神薄弱教育における教育課程の研究 1 Minimum Essentialsについて.2-24.
- 7) 高知県精神薄弱者育成会(1986):特殊教育事始め.ともに歩んだ道, 96-98.
- 8) 住田勝美編集(1970):精神薄弱教育の研究.金子書房,1-17.
- 9) 中嶋 忍・河合 康(2009):長野県の『尋常小学校特別学級規定』に関する史的研究—特別学級規定の策定と発展について—.発達障害研究,31,3,221-234.
- 10) 高木俊一郎,山口 薫,松岡 武編(1981):特殊教育の研究 精神薄弱教育の理論と実践.

金子書房.

- 11) 西谷英雄(1973)：精神薄弱教育における高知プランの考え方とその展開1,54-62.
- 12) 三木安正,島津一夫,林 知己夫,杉田 祐,山口 薫(1956)：精神薄弱の実態.東京大学出版会.
- 13) 茂木俊彦,高橋 智,平田勝政(1992)：わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究.多賀出版.